

内外交差点

客寄せパンダの為の「鳴り物」として 使われた「ライドシェア」

藤井 聡氏 (京都大学大学院教授) 第4/12回

昨年の総裁選で「ライドシェア」を自らの公約の一丁目一番地に据えて闘い、あえなく敗れ去った小泉進次郎氏は、農水大臣に就任し、「備蓄米を5キロ2000円で販売する」という差配をしたことによつて一躍「時の人」となった。5キロで4000円、5000円を上回る程の米価の高騰に困り果てていた多くの国民はこの「進次郎裁定」を大いに歓迎したからである。

結果、にわかに進次郎フィーバーとでも言うべき現象が日本を席卷し、人気低迷にあえいでいた石破政権は支持率を幾分回復するに至った。そしてある世論調査では、「次期総理大臣として期待する政治家」としてそれまで連続してトップをとり続けていた高市早苗氏を抜き去り、進次郎氏がトップとなった。この流れを受け、永田町では人気の無い石破氏の代わりに進次郎氏を総理にすげ替えることを通して、自民党の再生を図ろうではないかという声もしばしば聞こえるようになったのだが——実に無定見で軽薄なものなのだろうと嘆かざるを得ない。

一国の総理を「客寄せパンダ」と考えるような国家は、早晚滅び去る他ないではないか。

確かに「2000円米」に多くの国民は狂喜したのかもしれないが、それを実際に手にすることができる国民も一部に限られるし、そんな備蓄米はすぐに底を突く。しかも備蓄米がなくなれば米価はほぼ元に戻るであろうというのがあらかたの専門家筋の予想だ。

そして何より、仮に米価が幾分下がることがあったとしてもだからといって進次郎氏が総理に相応しいのかと言えば、それとこれとは全く別問題だ。

進次郎氏に米国トランプとの各種交渉ができるのか、あの安倍元総理ですら手こずった財務省を国益のために使いこなすことができるのか、そして尖閣問題をかかえた中国と適切な外交を取り結ぶことができるのか——こうした諸点について「進次郎なら大丈夫だ」と確信している政治家なり国民など（少なくとも筆者の知る限り）ほとんどいない。

それにも関わらず彼が総理候補ナンバー1として持ち上げられるということは、永田町にも国民世論にも総



理大臣というものは「客寄せパンダ」程度の役職だと認識しているという事だと言わざるを得ない。

実に恐ろしき時代になったものである——がそれをさておくとしても、その「客寄せパンダ」であるところの進次郎氏はなぜ、昨年の総裁選の時に「ライドシェア」なる、極めて特殊な一業界の一業務形態の導入を「公約の一丁目一番目」に据えたのか？

その答えの一つは既にこれまでのこの連載で論じたように、それで利益を得る国内外の諸法人からの依頼があったからであることは間違いなかろう。しかし、「客寄せパンダ」は常に「客寄せ」のための仕掛けが必要だ。それはチンドン屋が練り歩く時には鳴り物が必要だということと同じだ。進次郎氏、あるいは進次郎氏をかかえ総裁選の折りに支持した陣営はそんな「鳴り物」として「ライドシェア」なる新しい概念を活用したのだ。彼が今使っている鳴り物は「2000円米」だが、昨年の総裁選時に使ったのは「ライドシェア」だったのだ。

しかし「客寄せパンダ」にしてみればライドシェアは単なる「鳴り物」だとしても、各地の地域住民にしてみればそれは鳴り物ではなく生活するためになくてはならぬ（つまりエッセンシャルな）「地域の足」の問題なのだ。昨年の総裁選では、進次郎氏はほどなく人気を失い総理の座を逃したのだが、現下のような世論状況では彼が総理になる可能性はまだまだあると考える他無かろう。そして実際に彼が総理になるのなら、その時たまたま彼が使っていた「鳴り物」は大きく推進されることは確実だ。もしもその時の鳴り物が「ライドシェア」であったとするなら、ライドシェアが導入され各地の「タクシー社会」が大きく混乱することは必至だ。

そんな悪夢の実現を避けるためにも、我々日本人は総理を客寄せパンダ扱いするような愚挙を徹底的に回避することが必要なのだ。今、日本に何よりも必要なのは客寄せパンダなぞ所詮パンダなりと見抜く人間としての最低限の「真面目」さ、なのである。